

演題名：と畜検査における疾病の状況

発表者氏名：田中健一郎

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1. はじめに：滋賀県には近江八幡市内に県内唯一のと畜場があり、当所では毎年約 8,000 頭の牛のと畜検査を実施しており、令和 3 年度は 8,352 頭の牛のと畜検査を実施した。当所ではと畜場への健康な家畜の搬入や食肉の安全性の確保のために、と畜場で行われる日々の検査の状況等を家畜の生産段階での飼養環境改善等による疾病発生対策を促進することを目的として、生産者に情報提供している。

今回、と畜検査でみつかった主な疾病を集計したので、その概要を報告する。

2. 材料および方法：令和 3 年度にと畜検査で見つかった疾病を四半期ごとに計上し、比較した。併せて、全部廃棄の措置を取った疾病については、平成 24 年度から令和 3 年度までの 10 年間の頭数を年度ごとに計上し、比較した。
3. 成績：各四半期の疾病発生率の上位 3 つはすべて同じ疾病であり、多いものから順に、肺炎(24.3~39.1%)、鋸屑肝(20.9~23.8%)、脂肪壊死(9.3~14.9%)となった。また、四半期ごとの発生率で最も差が大きかったのは肺炎で、10~12 月が 39.1%であったのに対し、4~6 月は 24.3%であり、約 15%の差がみられた。

10 年間の全部廃棄疾病の頭数については、多いものから順に、牛伝染性リンパ腫(従前の牛白血病)が 97 頭、尿毒症が 43 頭、敗血症が 41 頭となった。推移をみると、平成 26 年以降は、牛伝染性リンパ腫が最も多く、全部廃棄疾病に占める割合は、42.9~64.7%となった。また、牛伝染性リンパ腫は、平成 30 年に前年の 7 頭から 14 頭と 2 倍に増加し、その後も同程度で推移していた。

4. 結論：と畜検査で見つかった疾病のうち、肺炎が最も多く、また、季節間での差も大きいことが分かった。24.3~39.1%と高い割合で認められていることから、牛群間で流行している可能性が考えられた。また、四半期ごとの発生率で差が出た要因については、肺炎は、一般に寒冷によるストレスや換気不良に伴うアンモニアガスの蓄積などの環境要因により冬季に多くなるとされており、それら環境要因による可能性が考えられた。

牛伝染性リンパ腫については、全国的にも増加傾向にあり、対策が必要な疾病の 1 つである。当と畜場においても平成 30 年に 2 倍に増加するなど、増加傾向にあることから、動向を注視するとともに、生産者に注意喚起を行っていく必要がある。

今後も、引き続きと畜検査でみつかった疾病の情報を蓄積し、生産者への情報提供に活用したい。